

私部南遺跡 (その2) 発掘調査現地公開資料

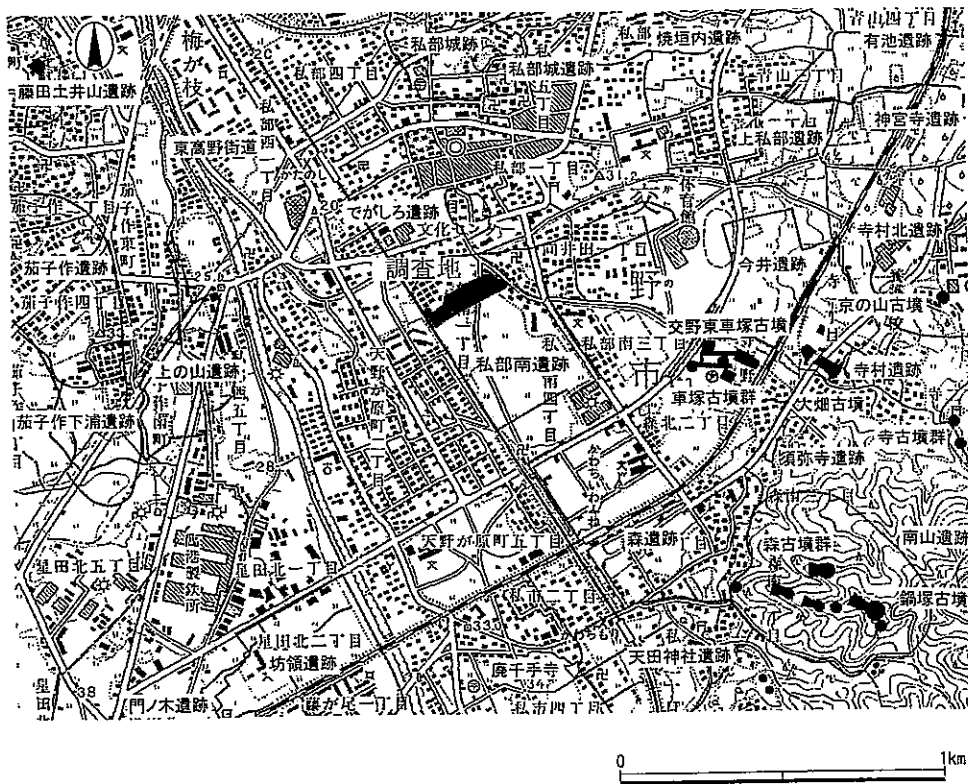
財団法人 大阪府文化財センター

はじめに

当センターでは、第二京阪道路の建設に先立ち、私部南遺跡の範囲の西端に当たる京阪電鉄交野線から前川までの範囲を(その2)として、平成18年8月から発掘調査を実施しています。これまでに道路建設予定地の内、南北両側に沿った側道建設予定地部分の第1調査区～第4調査区について調査を終了し、現在、その間に挟まれた高速道路部分の橋脚建設予定部分について、順次、発掘調査を進めています。これまでも本年1月20日に第1調査区の現地説明会を、また5月9日には第3調査区の現地公開を実施してまいりましたが、第5調査区～第7調査区についても遺構の内容が明らかになってまいりましたので、現地を公開しその成果を広く公表するものです。

これまでの調査成果の概要

これまでの調査では、現地表下0.5～0.6m付近で中世の耕作面がほぼ全面に広がっていることが確認されたほか、さらにその下層に縄文時代中期末から平安時代にかけての遺構が同一面で重複して遺存することが明らかになってきました。



私部南遺跡とその周辺の遺跡

第1調査区では、弥生時代前期末から中期前半にかけての溝や土坑とともに、3回以上にわたって建て替えが行われたとみられる大型円形住居が検出されており、当該時期の拠点集落が営まれていたことが窺われます。また古墳時代後期の方形竪穴住居や掘立柱建物と無数の柱穴、東西・南北、縦横に開削された溝や土坑、井戸などの遺構が多数検出されており、古墳時代後期になって再び大規模な集落が営まれたことが明らかにされました。さらに断片的ではありますが縄文時代中期末ごろの縄文土器が、袋状土坑などの遺構に伴って発見されたことも特筆すべき成果と言えます。

第3調査区では、「V」字形に開削された深い溝や3棟が重複する方形竪穴住居などがみられ、また、倉庫と考えられる多数の総柱の掘立柱建物群が出現するなど、古墳時代後期に活発に集落が営まれた様子が窺われます。また、これらの建物群は、その一部がさらに奈良時代や平安時代まで時代が下ることも明らかにされました。一方、調査地の南辺にかけては弥生時代の遺構が希薄となることも解ってきています。

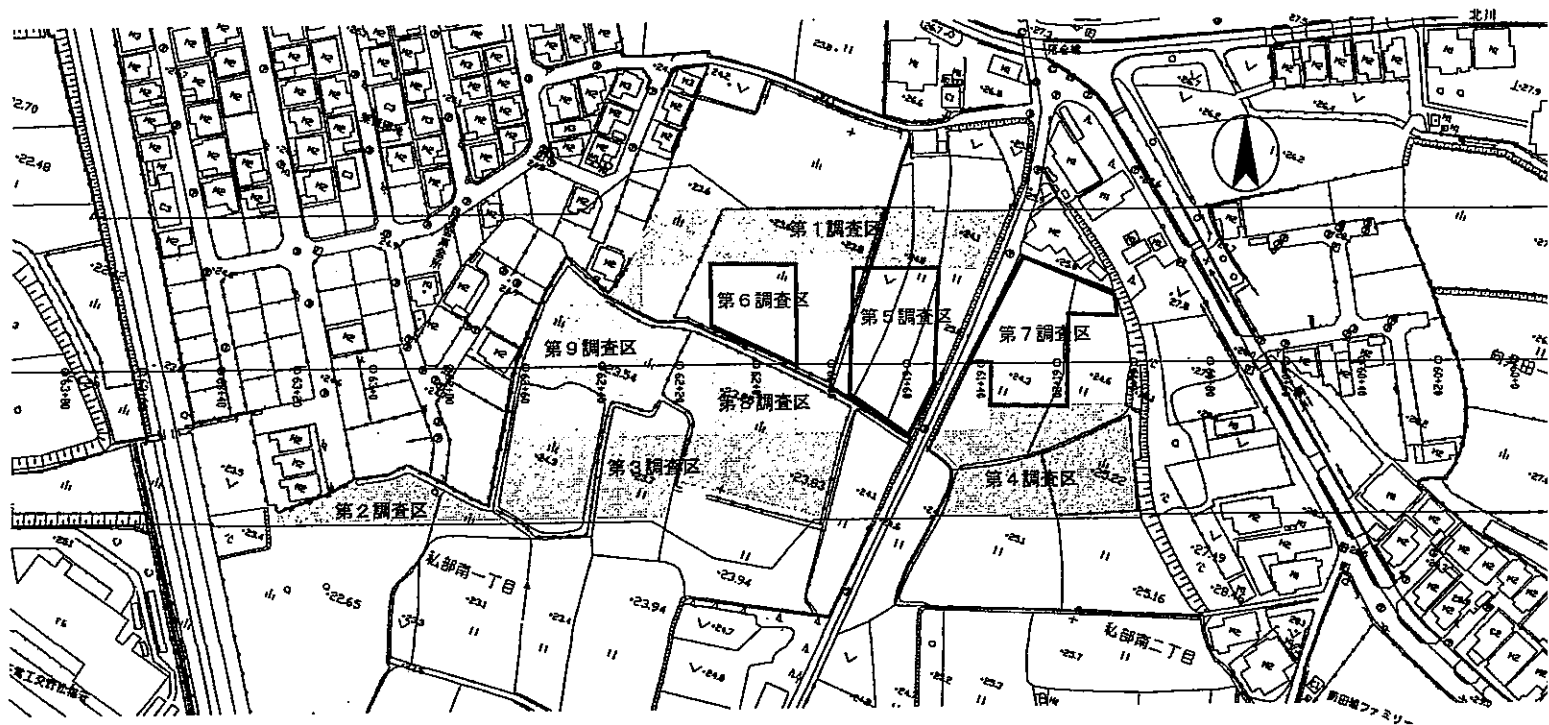
市道森南線を挟んで東側の第4調査区では、遺構は少なく、現在は高い堤防を伴う天井川化した前川の下層に埋没する浅い谷地形に向け地形が傾斜していたことが解ってきました。

第5調査区～第7調査区の概要

調査対象地は交野山の西麓に形成された扇状地西端の標高24m付近に立地しています。

今回公開する調査区は、着手順に橋脚建設予定位置に当たる第5調査区約760㎡、第6調査区約400㎡、第7調査区約760㎡の3ヶ所です。

各調査区とも第1遺構面（中世～近世）、第2遺構面（中世）、第3遺構面（弥生時代～平安時代）の3面の遺構面を検出しており、第1・第2遺構面では畦溝等で構成される耕作面、第3遺構面では第5・第6調査区を中心に弥生時代前期末～中期前葉の土坑や木棺



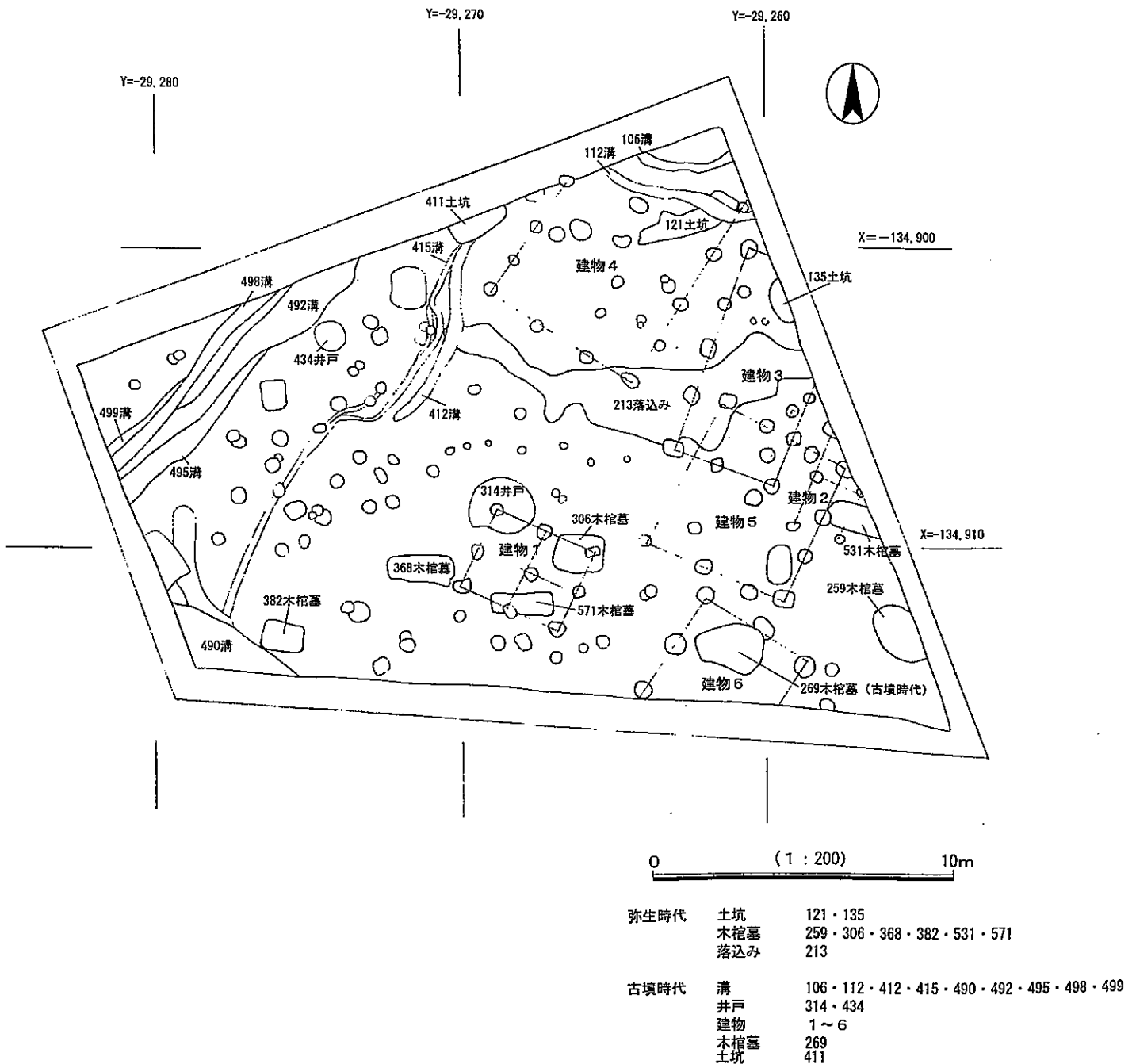
私部南遺跡（その2）調査区配置図

墓など、また古墳時代後期の掘立柱建物や多数の柱穴、切り替えや人為的な埋め戻しを繰り返す複数条の溝、土坑などがそれぞれの調査区で検出されています。これに加え第7調査区では平安時代の掘立柱建物群などがまとまって検出されています。

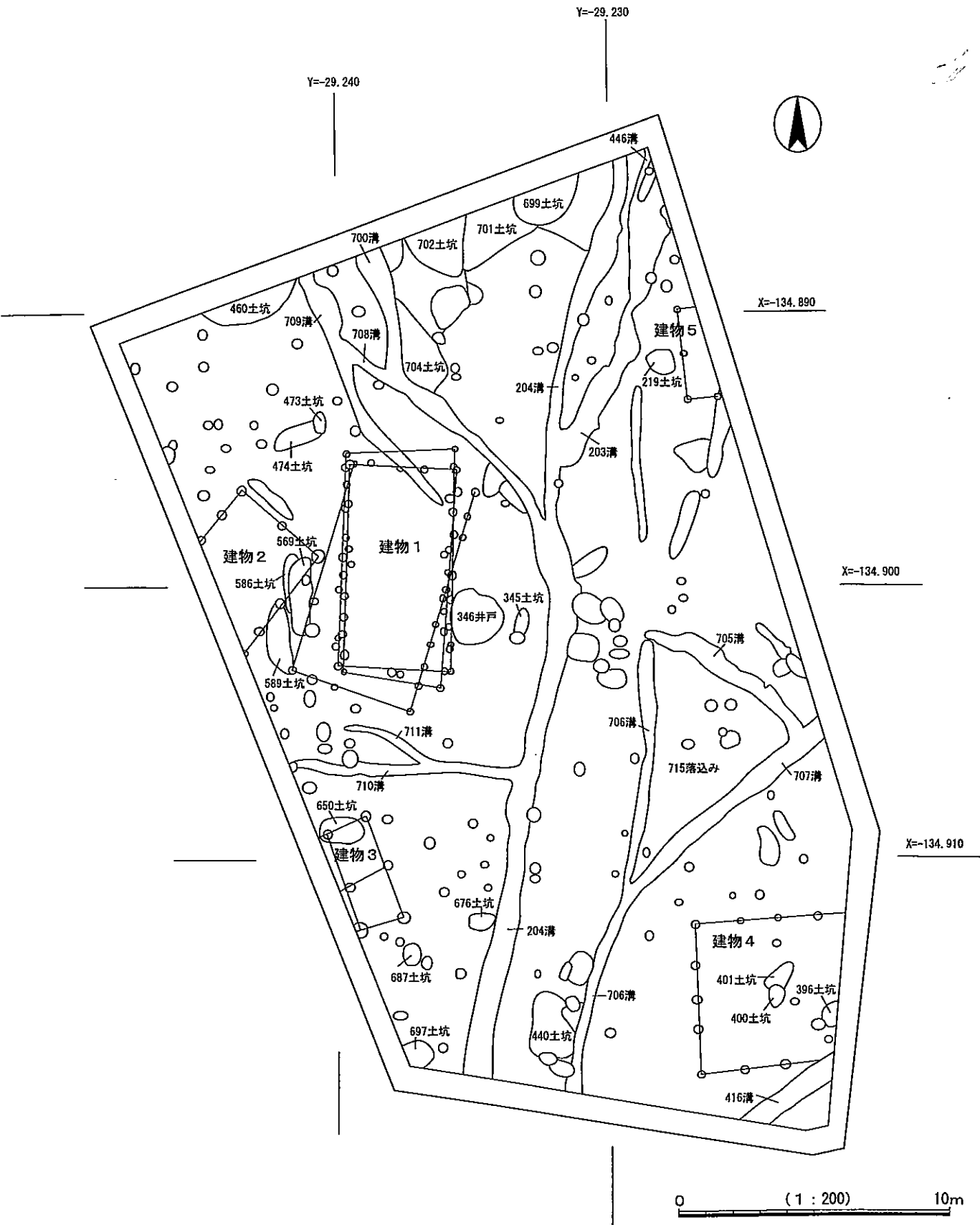
<第6調査区>

今回公開する調査区の内、最も西に位置する調査区です。

調査区南辺には現在も調査区域を東西に貫通する幹線水路が流れていますが、その直下で当初の溝と見られる大規模な溝が第2遺構面で検出されています。従って、現在も残るこの水路による土地の利用・区画は、中世にまで遡ることが解ります。



第6調査区 第3面遺構平面図



弥生時代	土坑	345・396・400・401・473・474・569 586・589・650・676・687・697
古墳時代	土坑	460・699・701・702・703・704
	井戸	346
	溝	203・204・416・446・700・705・706・707・708・709 710・711
建物		1～5
	落込み	715
奈良時代	土坑	219

第5調査区 第3面遺構平面図

調査区南半を中心に弥生時代前期末～中期前半にかけての土坑墓・木棺墓6基がほぼ東西に主軸を置き、列を成すように見つかりました。僅かに土器片が出土するのみで、副葬品などは認められません。2段に掘った穴に板材を立て並べて棺とした簡単な構造の墓と考えられます(382・368・571・306・259・531)。他にも僅かな骨片とともに前期の土器が出土した135土坑も認められ土器棺墓の可能性が考えられます。

古墳時代の遺構としては、倉庫と見られる2間×2間総柱掘立柱建物2棟、2間×4間以上、3間×4間以上の掘立柱建物など6棟以上が検出されたほか、掘立柱建物を構成するとみられる無数の柱穴が検出されており、活発に集落が営まれた様子が窺われます。また第1調査区から続く溝も検出されており、濃密な集落遺跡の状況を示しています。

<第5調査区>

弥生時代の遺構は、第1調査区や第6調査区に比べるとやや散漫となり、土坑や落込みが点在するように検出されています(473・474・569・586・589・345・400・401・396・650・676・697土坑)。第4調査区・第7調査区の状況と併せて、集落の縁辺部分に位置するものと考えられます。

古墳時代の遺構としては、第1調査区から連続する溝が検出され、それらが複雑に切り替えられ、あるいは合流・分岐する状況が窺われます(204・203・700・708・709溝)。これらの溝からは、焼成不良や焼歪みが見られる須恵器が多数出土しており、これまでの調査成果とともに須恵器生産との関連を色濃く反映していることを想定させます。建物跡としては、小径の柱穴を無数に長側面に配置した建物遺構が主軸をやはずらしながら3棟が重複して検出されています(建物1)。この他にも掘立柱建物4棟が検出されています(建物2～5)。また調査区中央付近には素掘りの井戸1基が検出されており、各調査区で検出された他の井戸とともに、扇状地縁辺部での湧水帯をうまく利用していた様子が窺われます(346井戸)。調査区北辺では、第1調査区南辺で検出された大型の不定形土坑の南半が連続して検出され、その全体の形状を確認することができました(460・699・701・702土坑)。調査区北東部では一辺約1mを測る炭化物を敷き詰めた方形土坑1基も検出されています(219土坑)。

<第7調査区>

古墳時代については、倉庫と考えられる総柱の建物(建物1・5)、やや大きい隅丸方形の柱穴で構成される建物(建物3)など合わせて9棟の掘立柱建物が検出されています。他にも多数の柱穴や溝、土坑などが検出されています。このうち調査区南辺に沿って検出された溝は、幅1.3m、深さ1.1mを測り、断面が深い「V」字状を呈しており、第5調査区をかすめ第3調査区を縦断する溝に連続するものとみられます。また、調査区北端に位置する柱穴跡からは滑石製の子持勾玉も出土しています。

平安時代の遺構としては、掘立柱建物(建物4・11)や柵列(柵列1～4)、「コ」の字状に曲がる溝(150溝)、土師器皿と黒色土器を埋納したと思われるピットや土坑などが検出されており、第3調査区西部とともに平安時代の遺構が色濃く認められます。

弥生時代に関しては遺構・遺物ともに希薄な状況ですが、調査区中央付近の落込みから縄文時代中期の土器がややまとまって出土しており注目されます。

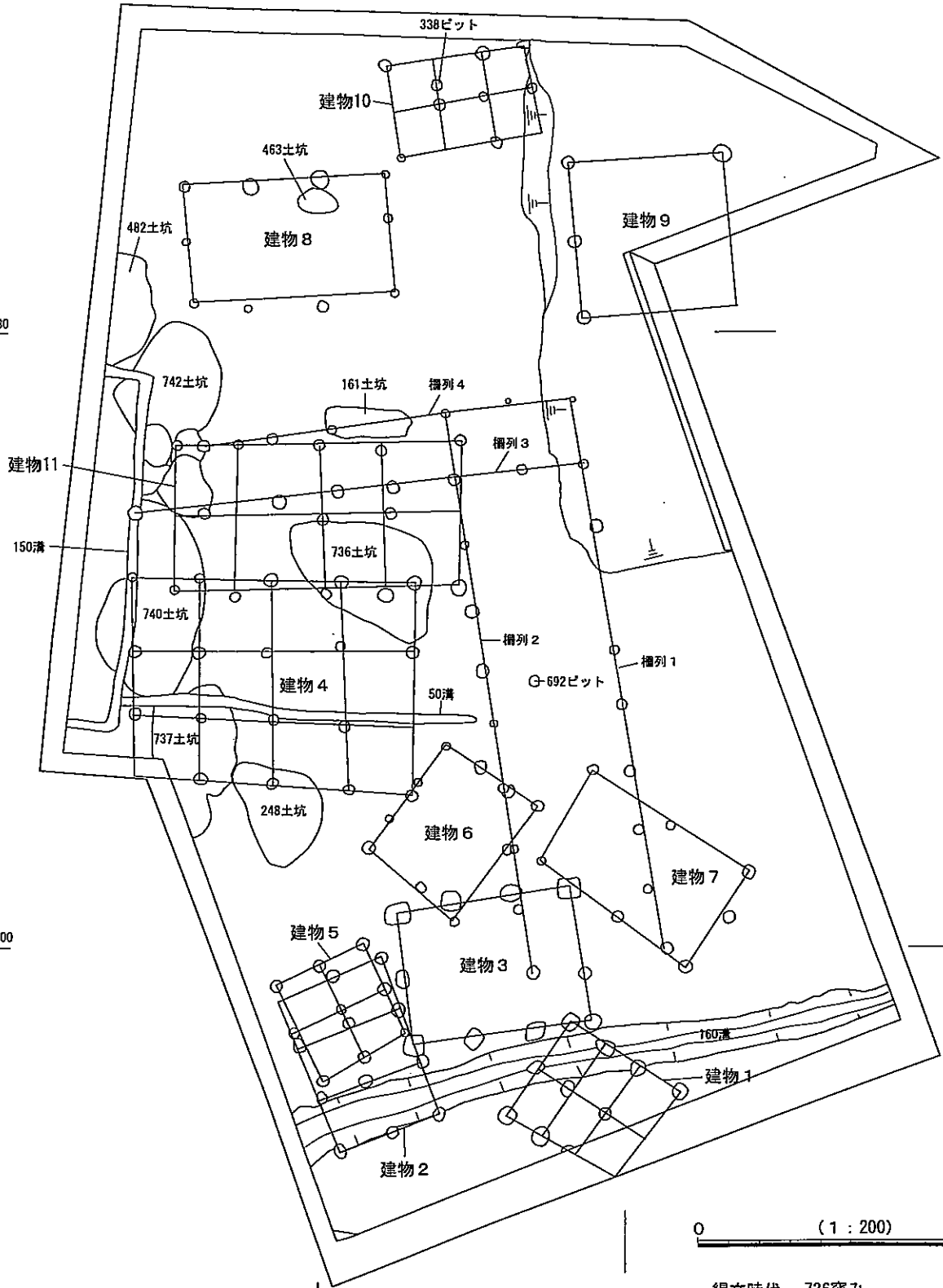


Y=-29,200

Y=-29,190

X=-134,880

X=-134,900



0 (1 : 200) 10m

- 縄文時代 736窪み
- 弥生時代 463土坑
- 古墳時代 建物 1~3・5~10 ピット338
土坑 248・482・737・740・742
- 平安時代 建物 4・11 溝 50・150
土坑 161 埋納ピット692

第7調査区 第3面遺構平面図

まとめ

これまでの調査から次のような成果が挙げられます。

①縄文時代の遺構の発見

大阪府内で遺構に伴って縄文土器が出土する事例は稀であり、今回の調査で縄文時代中期末ごろの土器が遺構に伴って発見されたことは注目されます（第1調査区）。

②弥生時代前期末～中期前半の集落の発見

大型円形住居を伴うことから、地域の拠点的な集落が営まれていたことが窺われます（第1調査区）。また集落の中心からやや外れた南側には木棺墓が東西に縦列状に並ぶ墓域となっていたことも解ってきました（第6調査区）。弥生時代の集落は、第1調査区を中心に北側に広がっていたものと考えられます。

③古墳時代後期の大集落の発見

倉庫群を備えており、何度も建物が建て替えられたものと見られ、活発に活動する大規模な集落が営まれていたことが窺われます。

出土遺物に焼成不良や焼歪みを有する須恵器が多数認められることから、須恵器生産との関連や近隣に須恵器窯が存在することが強く想定されます。

④古代の集落の発見

第3調査区の南西区域で奈良時代の掘立柱建物が検出され、柱跡に納められた一部を打ち欠いた皿が発見された他、金銅製の帯金具が出土したことは、「私部」の地名とともに注目されます。

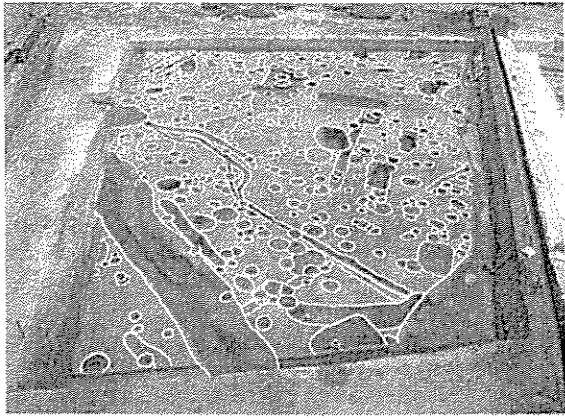
また第3調査区の南西区域と第7調査区では、10～11世紀ごろの黒色土器や土師器を伴う掘立柱建物が検出されており、平安時代にもまとまった建物群が存在したことが明らかになりました。これらの建物は柱穴に根固めの石材を据えたり、黒色土器の椀や土師器の皿を埋納するなど、興味深い内容が認められます。

⑤現在にも通じる中世からの土地利用

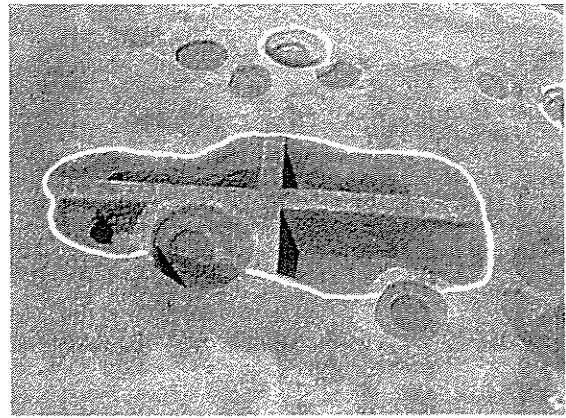
現在も調査地を東西に流れる幹線水路は、第6調査区で水路の下層で確認された溝の状況から、第2遺構面として検出される中世の耕作面の段階で既に機能していたことが推測され、調査地周辺での耕作地としての土地利用が、少なくとも中世、室町時代にまで遡ることが明らかにされました。



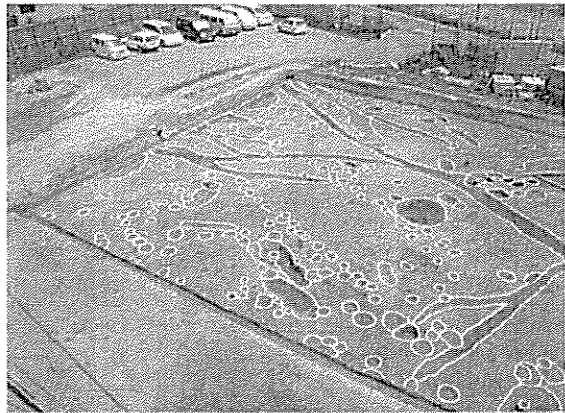
私部南遺跡（その2）の遺構の分布と旧地形



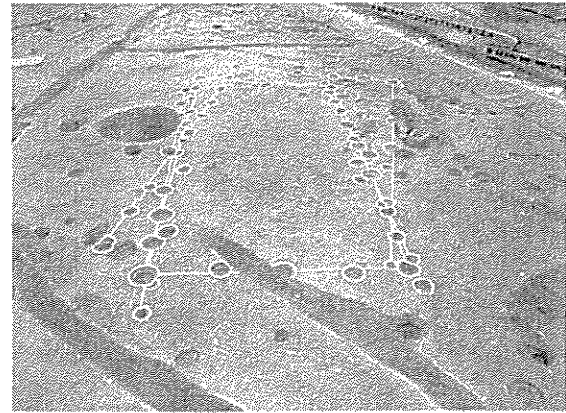
第6調査区 第3遺構面全景(西から)



第6調査区 571木棺墓



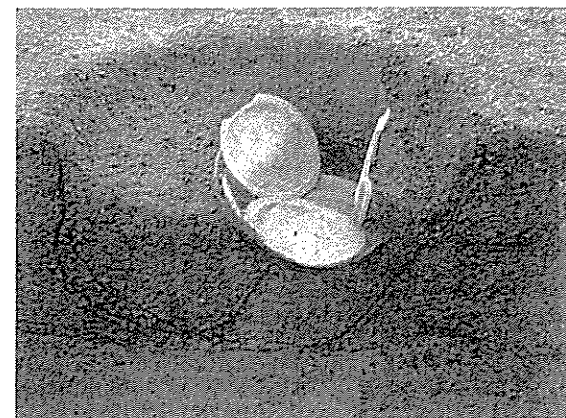
第5調査区 第3遺構面全景(西から)



第5調査区 建物1



第7調査区 第3遺構面全景(北から)



第7調査区 黒色土器・土師器皿を埋納した穴